
日が昇る方へ～2人の家重～

日野五十鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日が昇る方へ～2人の家重～

【NZコード】

N0116K

【作者名】

日野五十鈴

【あらすじ】

江戸幕府第9代将軍、徳川家重。彼には重大な秘密があつた。それは…。

(前書き)

本作は史実を元にしたフィクションです。なので事実とは異なる点があります。予めご了承ください。

江戸幕府第9代將軍・徳川家重とくがわいえしげ。

1745年（延享2年）11月、將軍宣旨をつけた。

幼児から虛弱なうえに言語明晰を欠き、ただ側近に仕えた大岡忠光おおか・ただみつだけは、ひとり家重の難解な言語を理解したという。

忠光は家重の意にそよぎにつとめたため信任を受け、側用人に昇進して権勢をふるつたと言われている。

だがしかし、家重には重大な秘密があつた。

それは…。

■ ■ ■

家重ちょうふくまる…長福丸ながふくまるが伏ふせに出逢つたのは、まだほんの幼い頃だ。

逢つたというか、ひょんなことから伏の存在を知つた長福丸が、自ら会いに行つたというほうが正しい。

『…お前が伏、か?』

そのときの伏の顔を、今でも家重は憶えている。

睫毛の長さまでじぶんにそつくりな少女だ。苦虫を噛み潰したような顔も、きっと自分と似てることだろう。

伏の返事を待たず、長福丸はくわうと叫んだ。

『いいか、お前なんぞに公方の地位は渡さんからなーー!』

伏の沈黙は僅かなものだった。すぐに不機嫌そうに溜め息をつく。

『…私が決めたことじゃない。それに君が将軍になつても、やるることは殆どないと思つよ』

…それからすぐ、長福丸は伏の言葉の意味を理解することになる。

江戸幕府第8代將軍、長福丸の父にあたる徳川吉宗は、長福丸に、人の“少年”を引き合わせた。

『これからお前の傍につかせる。名は家重。お前の友としてよきよう使いなさい』

長福丸は訝しがった。男のナリをして雰囲気も別人のように違うが、この自分そっくりの顔といい間違いなくあの会いに行つた“少女”だ。

『家重？ 伏でしょ、う？』

吉宗は巨躯を揺らして笑った。

『悪い奴だなあ長福丸。よくこいつを見つけたものだ。だが幕府は“家重”に任せることに決めた。なに、心配せずともすぐ慣れる』
…吉宗仕込みの伏の変化は徹底していた。ちょっととした仕草や表情はもちろん、声色も見事に使い分け、“家重”は長福丸になりきつた。

一族の誰もが“家重”と“伏”が同一人物だと気付くことはなかつたし、そもそも“家重”と長福丸が別人だとは思いもしなかつた。
そして伏の言つたとおり、長福丸が第9代将軍となつても、彼のすることは殆どなかつたのだ。

■ ■ ■

伏には名が2つある。

男子としての名は、家重。

女子としての名が、伏。

男子の家重は江戸幕府第9代将軍に、女子の伏は大奥女中として仕

えた。

長福丸…家重は始終大奥に入り浸り、まるで政事をしない。結果として幕府の指揮は、代わりに“家重”がとることになる。

このことを知っているのは、側用人の大岡忠光だけだ。

虚弱と偽して細くなよやかな肢体に袴を着用し、言語明晰に欠くと偽して忠光にその高い声をこつそり耳打ちした。

在位から15年、その体制は変わらなかつた。変われなかつた。他に居場所もなく、行くところもなく、大奥に入り浸りの家重に幕府を指揮する器量もなかつたから。

だから“家重”はそのまま公方の座に居座り続けた。そうして江戸幕府第9代將軍『徳川家重』として“家重”は江戸城に残つた。

最後の砦・大岡忠光が死去するまでは。

■ ■ ■

“家重”…伏は、大奥でひとり将棋をさしていた。

将棋をさすのは好きだが、大奥にある濡縁で、月明かりを頼りにひとりで遊ぶ将棋が伏は殊の他好きだった。

パチパチと、駒が音をたてる。

(…もし將軍が代替わりしたら、私はどうしよう)

パチン。

(家治様が將軍になられたら、私なんて別に必要ないからなあ)

おそらく『徳川家重』は追い出されることになるだろう。大奥において伏の代わりはいくらでもいる。田沼意次たぬま・おきつぐがいる今、“家重”なんてなおさら誰にも必要ない。それどころか、邪魔になるだけだ。

広大な城の中で、伏はふと、世界に1人きりになつたような気がした。

そのとき、いきなり真夜中の闇の中からにゅつと家重が現れた。

「おい伏」

「うわあっ！ ちょ、長福丸か。あーびっくりした」

「長福丸と呼ぶなど言つてゐるだらう。いいかげん家重と呼べ！」

「しかたないだろ… でしょ。呼び分けないとややこしいんだから」

なにせ十年以上も公方をやつてきたのだ。多くの大奥女中に囮まれてるときならいざ知らず、家重と2人きりのときは“伏”と“家重”“じゅぢゅ”的な口調になつてしまつ。

家重は盤を挟んで伏の向かいにドカツと陣取つた。

「…賭け将棋でもしようか、長福丸」

伏は盤上に並べていた駒をひとつずつ指先で拾つてしまいこんでいく。

「それはいいが、一体何を賭けるんだ?」

駒を掌上で弄びながら、そうだねえ、と伏は咳く。

「…君が賭けに勝つたら、今後二度と“長福丸”とは呼ばない。どう?」

「それは良いが、お前が勝つたら?」

私? とすっとぼけながら、ふふん、と鼻で笑う。

「そうだねえ…じゃあ私が勝つたら…」

■■■

そして1760年（宝暦10年）。

家重の長子、徳川家治が江戸幕府第10代將軍になる。

その治世はいわゆる田沼時代と呼ばれる時期にあたり、老中・田沼意次の積極的な施政によって産業は発展し、文化も興隆する反面、

賄賂の流行による綱紀の紊乱、士風の退廃が著しかった。

家治は田沼の才氣を愛して側用人、更に老中にまで取り立てたが、晩年は批判的な態度をとつた。

田沼も謹直な家治を煙たがり、家治の死は田沼の毒殺によるものだとこづ噂をたてられたほどである。

そのころ、家重と伏は…。

■■■

「さて、どこに行こうか」

家重と伏は野の中、馬を駆つていた。

「北の島には冬になると流氷が見られ、南の島では色とりどりの珊瑚がお目にかかるらしいぞ」

「…私、東に行きたい」

「東に？」

うん、と伏は頷いた。

家康公が幕府を開いて約160年…過去に織田信長が室町幕府を滅おだ・のぶなが

ぼしたように、または豊臣ヒヨウジンが滅びたように、いつかは江戸エド幕府も終わりが来るだろ？。

もしかしたら、今までとは全く違う、新しい世界が開けるのかもしない。

伏は、常に昇る太陽を見ていたかつた。

新しい日の幕開け。

「…わかった。それがお前の“賭け”の対象だからな」

『長福丸…私、旅に出たい』

徳川の輜シがなくなつた今、居場所はどこにもない。逆を言えれば、どこにでも行ける。

伏の新しい夜明け。

「行くか」

「…うん」

そして、2人は馬を走らせた。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0116k/>

日が昇る方へ～2人の家重～

2010年10月21日03時31分発行